

宇輝人

vol.80

初の全国大会で優勝

昨年10月27日から4日間、神奈川県川崎市で開催された民謡民舞全国大会。各地から厳しい予選を突破してきた者のみが出場できる舞台だ。久原正次さんはその民謡中年部旗戦で優勝を勝ち取った。

以前にも、県内の大会に出場したことはあったが、全国大会に出場したのは今回が初めて。

当然、優勝できるとは思っていなかったが、本番の大舞台で練習の成果を発揮し、全力を尽くした。

結果を知らせる司会者の言葉に耳を傾けていると、「110番、久原正次さん。」と出場した部門の優勝者を告げるアナウンスが。「すぐには信じられなかつた。」とその時の思いを語る。

きつかけとなつた出会い

14、15年前、トマト農家を営む久原さんは、JAに勤める友人が民謡を習っていると聞き、教室に行ってみることに。「全体を使い、声で表現する民謡とその伝統文化の重みに、一瞬で魅了されました。」と懐かしむ。

中学の担任の影響で、若い時からクラシック音楽に興味があった久原さん。先生は、授業の合間にベートーベンやチャイコフスキー作曲のクラシック音楽をいつも流してくれた。高校生からはより良い音で聴きたいと、オーディオを一つ一つそろえ始めた。「西洋のクラシック音楽好きから始まり、民謡とい

う、いわば日本のクラシック音楽に興味を持ったのも自然な流れかな。」と語る。

小さい頃から歌うことが好きで、伝統文化を若い世代に残していかなければという強い信念を持つ久原さん。元々、日本人の魂に刻み込まれている民謡。年配者がやるものというイメージを払拭したいとの思いをにじませる。

伝統を未来へつなぐ

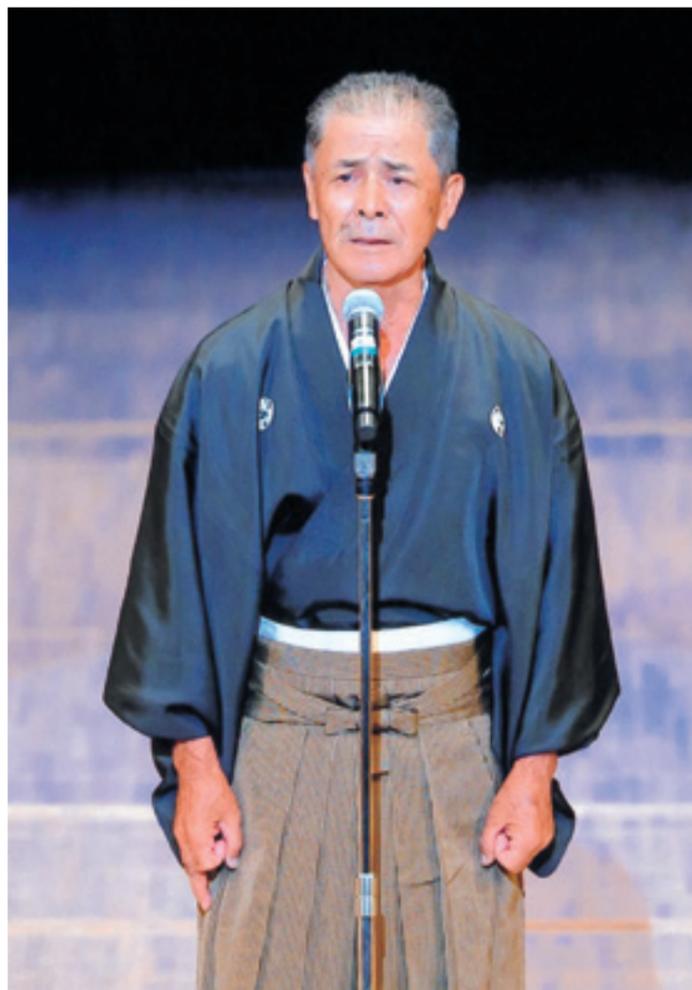
現在は月2回の練習とは別

に、関係深い尺八も始めた。このような活動ができるのも妻の理解があつてのことと、はにかんだ笑顔を見せる。

また、老人ホームでの慰問活動なども行っている。農業委員会の委員や行政区長を10年続けた久原さんにとって、違った形で地域と関わり続けることも生きがいの一つ。

好きな唄で健康を保ち、伝統文化の継承につながるの思いを根底に、日々努力を惜しまないひたむきな姿が周りの人を元気にしていく。

優勝を獲得した民謡民舞全国大会の大舞台で堂々と唄う久原さん



伝統文化を若い世代につなぐ



10年以上栽培を続けるミニトマト

久原 正次

kubara syouji

松橋町生まれ。知り合いの勧めで民謡を習い始め、民謡民舞全国大会の民謡中年部旗戦(松の組)に出場。「球磨川舟唄」を披露し優勝を飾った。尺八やギターの演奏など、多岐にわたる才能の持ち主。本業はトマト農家で新たな甘い品種の栽培に力を注いでいる。

尺八の音が教室に響き渡る



優勝旗を手に、再び感動がよみがえる

